

## 「2020秋の課題作文」の資料読み取りについて

北進ゼミナール

### 1. はじめに

今回のテーマは「令和2年7月豪雨」でした。気象庁の「過去の気象データ」より抜粋した表を読み取って、球磨川流域の河川氾濫が想定外とされる根拠を記述してもらうことが一つの狙いでした。

しかし、一定数の生徒が資料の読み取りが誤っていたり、記述に当たっての指示を守っていなかったりしています。資料の読み取りは高校入試の国語や社会でも求められている力です。誤った読み取りの具体例と模範的な記述例を以下で示していきます。自分自身の記述内容と比較して、正しい読み取りのコツを掴んでください。

### 2. 課題作文で提示してあった資料

以下が課題作文で提示してあった資料です。理解し易くするために、□で囲んだり、補足説明を入れたりする加工を行っています。条件は「課題文では今年7月の球磨川氾濫は想定外の災害であったとしています。筆者がそう考えた根拠を資料Ⅱから1965年・2020年・平年それぞれの連続した2日間の総雨量を対比させながら「想定外」という言葉を用いて200～300字程度で書いてください」というものでした。

【資料Ⅱ】1965年・2020年・平年(1981～2010年の平均)の人吉市の7月上旬日別降水量

7月	1965年の降水量	2020年の降水量	平年の降水量
1日	70.5mm	0mm	20.7mm
2日	108.8mm	0mm	20.6mm
3日	<b>1965洪水</b> 103.3mm	121.0mm	20.4mm
4日	47.7mm	299.0mm <b>2020豪雨</b>	20.0mm
5日	39.9mm	75.0mm	19.5mm
6日	94.3mm	110.5mm	19.0mm
7日	0mm	125.5mm	18.4mm
8日	1.7mm	33.0mm	17.7mm
9日	0mm	35.0mm	17.0mm
10日	0mm	25.0mm	16.4mm

(気象庁「過去の気象データ」より抜粋引用)

注1:昭和40年(1965年)7月洪水では7月3日に人吉の市街が浸水した。

注2:令和2年(2020年)7月豪雨では7月4日に人吉の市街が浸水した。

注3:氾濫要因と降水量の関係について

河川氾濫のメカニズムは複雑であるが、基本的には周辺部や上流部で短時間に集中して降る雨量が平年より著しく多い時に発生すると考えてよい。ここでは連続した2日間の総雨量に着目して欲しい。

### 3. 誤った記述例

- ・「浸水日からの降水量は285.2mmに対し、今年は浸水後も6日連続で降水を記録し、浸水日以降の降水量は1965年の約2.5倍である703mmであった」
  - ・「1965年の降水量は103.3mmで今年は299mmにも達している」
- 二つとも「連続した2日間の…」という指示を守っていない。

・「今年の7月6日と7日の降水量は235mmで平年と比べ約6倍になっている」

→7月6日と7日を取り上げた根拠が不明。

・「人吉市の総雨量は約400mmであり平年の約4倍となっている」

→読み取りミスか？平年の約10倍が正しい。

・「たとえ想定していたとしても約2倍もの雨が降ったら対応は困難だ」

→前段に平年・1965年のデータを掲載してあるが、どちらと比較して2倍なのかが不明確。

・「1965年7月と比較しても約3倍である」

→おそらく同じ日付(1965年7月3日+4日)で比較してしまったと思われる。

#### 4. 正しい資料の読み取りと模範的な記述例

(1)正しい資料の読み取り方

①1965年7月洪水では7月3日に浸水が発生しているので、その前日からの(7月2日・3日)合計降水量が約200mmであったことを読み取る。

②2020年7月豪雨では7月4日に浸水が発生しているので、その前日からの(7月3日・4日)合計降水量が約400mmであったことを読み取る。

③平年の7月初旬(1~5日頃)の日々の平均降水量はいずれも約20mmであるので、20mm×2日間で約40mmであることを読み取る。

(2)模範的な記述例(資料読み取りの部分のみ抜粋)

課題文では今年7月の球磨川氾濫は想定外の災害であったと書いてある。資料Ⅱの「過去の気象データ」を見ると7月初旬の人吉市周辺では、平年の連続した2日間の合計降水量は約40mmであり、1965年7月に大洪水が発生した時でも約200mmである。ところが、令和2年7月豪雨災害が発生した際には2日間合計の降水量が約400mmに達している。これは平年の10倍であり、1965年7月大洪水の時と比べても2倍に相当する異常な数字である。これだけの降雨は過去の治水対策において確かに想定外であったと言えるだろう。

以上